

◆時代を読むキーポイント◆

中ソは「ゆるやかな同盟」関係へ

中嶋嶺雄

●根本的に変わる世界の潮流

「ゴルバチョフ書記長はこれまでの指導者とは違い、ソ連社会のどこが悪いかを知って

いる」「(ソ連の)改革の成功を祈る」と語ったレーガン米大統領の「サヨナラ演説」(一月十一日)は、きわめて印象的なものであった。その登場以来、「悪の帝国」ソ連との対決、「強いアメリカ」の再来を唱えてきたレーガン大統領が、かくも違った対ソ認識を抱くようになっていたからである。一九七〇年代末の「新冷戦の時代」以来十年、この間、世界の潮流は大きく変わった。

一方、去る十二月初旬の中ソ外相会談(モスクワ)の三十一年ぶりの実現に見られるように、「東」側世界も大きく変わろうとしている。五月十五日には、世紀の中ソ首脳会談が

(上)32年ぶりの中ソ外相会談 | 88・12・1、モスクワ
(下)人民大会堂でのシニルツ・鄧小平会談 | 88・7・15



いよいよ北京で開かれることになった。社会主義先進工業国ソ連と社会主義開発途上大国中国という社会構造上の相互依存・相互補充関係の強さから見ても、中ソ関係は今後、著しく緊密化するであろう。

同時に、ペレストロイカを進めつつあるソ連と、改革・開放戦略を進めつつある中国との共通基盤、共通項は、急速に拡大しつつあり、社会主義経済の長期的な困難と停滞も、相互依存・相互補充関係を強化せずにはおかない。

こうして、中ソ関係は、一九九〇年代に大きな構造的変化を見せるだろうことは疑えず、このような中ソ関係を基軸にして、社会主義諸国間関係も徐々に再編成されてゆくであろう。中ソ両国は、一方で西側諸国と交流を深めながら、社会主義の歴史的崩壊過程を延命させるためにも、相互に協力せざるを得ないのであり、国際政治の舞台では一種のゆるやかな同盟、関係を形成してゆくものと思われる。

●中国の対ソ政策決定要因

以上のような前提のもとで、ここでは一九九〇年代の中ソ関係を展望するための、中ソ双方の政策決定のあり方を中心に問題を考え

てみたい。

まず、中国の対外態度の規定要因をどのように理解するかが、ここでの大きな課題であるが、結局、中国は、その対外的な出方にたいては外部世界が決定的作用を及ぼすことのできない体質を、伝統的に保持していると私は見なしている。中国の最近のいわゆる近代化への本格的な離陸につれて、中国を西側化しようという、アメリカや日本の誘いがあるけれど、そうした外部世界の政策が中国に及ぼす影響力は限定的だと私は従来から考えてきた。よく言われるように、今日の中国は近代化を必要としているのだから、西側の資本や技術が必要である限り、中国の国益（ナショナル・インタレスト）に照らしても中ソ和解などあり得ない、という見方が、七〇年代の後半以来、内外でしきりに強調されたが、今日の中国は、そうした立場から大きく離脱している。中国はそうしたいわば西側からする「戦略的思考」や期待に影響されない体質をもった主体であることを強調せざるを得ないのである。それは、中国の対外政策、対外態度が次の三つのファクターによって大きく左右されるからだと言えよう。

その第一は、やはりイデオロギーという要因であり、第二はナショナリズムという要因、そして第三は中国の伝統である。この場合の

伝統は、いわゆる「中国的世界秩序」のことである。私はこの三つの要因が、中国の対外政策の基本的な決定要因になっていると考えており、これらの要因を与件として、それが中国の内政状況に媒介されて、その時々中国の対外態度が決定されるのではなかろうか。

この点を時代別に区分して見ると、五〇年代はイデオロギー志向がきわめて強く、六〇年代は「アメリカ帝国主義」ソ連社会帝国主義にたいする中国の激しい態度にも示されたように、ナショナリズムが前面に出ていた。そして七〇年代は米中接近にしても、中国のいわばサブ・システムであるベトナムにたいする政策（中越戦争）にしても、一種の伝統的な中国的な世界秩序認識がその政策決定に大きく左右したと言えよう。

このように見なしたうえで、中国内政を媒介項として考えると、最近の中国は国内的な非毛沢東化に伴い、当然、対外政策上の非毛沢東化が行われざるを得ないという問題が出てくるのである。まさに中国の世界戦略としての反覇権主義、反ソ主義は、毛沢東時代の世界戦略であり、非毛沢東化が進展した今日、中ソ関係の根本的改善という変化は、中国にとって当然の成り行きだと言えよう。つまり、ソ連を戦略上の敵と見なすかどうかは中国の

対外政策の根本に存在する問題であり、この点で今日の中国はアメリカの「勢力均衡」外交、ないしは「中国カード」政策にもかかわらず、アメリカ側の反ソ戦略に同調することは決してないであろう。レーガン政権下のSDI（戦略防衛構想）戦略への中国側の拒否は、このことを明瞭に物語っていた。こうして今日の中国は、中ソ対立の期間、そしてとくに七〇年代後半以降しきりに唱えられた対ソ脅威論から根本的に離脱しているのであり、今日の中国の指導者の認識は、当時とは根本的に変わっていると見ることができよう。

このような中国の対外政策への内政的な状況のかかわりについて若干触れるならば、中国の内政は当面の党内闘争・路線闘争から依然として解放されていないという問題を、ここでは強調せざるを得ない。この点を最近の例で見ると、いわゆる「四つの現代化」「開放」政策をめぐる、鄧小平路線と陳雲路線という旧実権派内部の新たな路線闘争が存在しており、同時にソ連に対しては、中ソ関係改善についてより積極的な立場に陳雲路線があると私は見なしている。やはり、ここでの決定的な要因の一つは、中国におけるイデオロギー上の拘束性という問題であろう。この点で今日の中国の「開放」政策についても、基本的に社会主義の存立基盤を脅かすよ

うな形で西側化、あるいはそのような形での市場経済原理の導入には、大きな限界があると言わざるを得ない。またこの問題をめぐっては、中国が社会主義を標榜するかぎり、今後もつねに中国共産党内部に党内闘争、路線闘争が存在するであろう。このような状況がナショナリズムや伝統という要因と重なって、中国の対外態度が形成されるのだと私は考えている。

●ソ連の対中国政策の基盤

それでは次に、ソ連についてはこの場合、どのような考えるべきであろうか。ここではあえて中国の場合とは別の角度から論じてみたい。

ソ連は伝統的に、国際政治上の二極構造を好ましいとするような、一種の政治文化ないしは政治的体質をもっているのではないかと私は従来から感じていた。この点についてはオックスフォード大学の亡きアステリア・バツカン教授も「二極構造こそ、ロシア人のプライドと慎重さにマッチしているのではないか」と強調していた。

こうしたソ連の伝統的な体質からすれば、キッシンジャー流の「勢力均衡」外交ないしは「中国カード」政策は、ソ連にとってきわ

めて刺激的であるばかりでなく、ソ連の対外行動を規定する根本的な心理にとって、きわめて挑発的なものであったと言えよう。この点で「中国カード」政策は、そうしたソ連外交の政治的体質を無視した挑戦であったと言わねばならない。従って、七〇年代以降は、アメリカも日本もソ連を大いに挑発しておきながら、ソ連の脅威を声高に叫んできたことになろうが、こうした戦略がソ連脅威論の裏側に存在してきたことについては、十分認識されてこなかったと言えよう。

そうした状況下でのソ連に対する挑発の結果、ソ連の戦略的拡大と軍事的増強をもたらしたとも言えなくてはならないのである。一九七八年夏の覇権条項入り日中平和友好条約の選択の時期に見られた日本及びアメリカの対応がそうであり、これを私は米・日・中の「太平洋横断的な反覇権連合」と呼んだのであるが、その結果、ソ連は必然的にソ越条約を結びインドシナ半島に拠点をつくる、あるいはインド洋に進出し、さらに太平洋に出てくるという結果をもたらしたのであり、ソ連をもつばら脅威と見なしてこのような刺激的な挑発行動をとったところにも、ソ連認識、ひいては現代の国際関係の根本に対する認識の欠如があったのではないかと思われる。

さて、ゴルバチョフ体制下のソ連は、いわ



ブレジネフ＝グロムイコのもとで二種冷戦思考を展開したG・アルバートフ（上）と、ゴルバチョフのブレインを務めるA・ヤコブレフ

ゆる「新思考外交」に基づく、グローバリズムを強調しはじめているが、そこでブレジネフ、グロムイコ、あるいはアメリカ・カナダ研究所長のG・アルバートフもそこに加えて、ソ連型二極構造認識がこれまでは一貫して存在してきたのであった。

これにたいして、現在、ゴルバチョフ書記長の周辺に登場してきた一種のブレイン・トラストは、ブレジネフ・グロムイコ・アルバートフ型の米ソを中心とする二極冷戦的思考とは根本的に異なった認識を表明しはじめている。その代表として、アレクサンドル・ヤコブレフ（ソ連科学アカデミー世界経済・国際関係研究所へIMEMO）の所長からソ連共産党中央委員会国際部長になり、さらに政治局長としてクレムリン入りしたゴルバチョフ書記長の有力な側近）のような認識があるとするれば、彼らの観点は一種の多極志向だと見えよう。

ヤコブレフの見解は、彼自身の著書「谷底

のふちに立って——トルーマンからレーガンまで、核時代の教義と現実——」（モスクワ、一九八七年）にはつきり表れているけれど、ヤコブレフは、米ソの二大国システムの振りにたいして、日本の役割をかなり重視している。もしも、ゴルバチョフ自身がいわばヤコブレフ型の多極型志向のグローバリズムに立つならば、ある意味ではニクソン・キッシンジャー・レーガン型にどこか似ているのではないかという気もしないではない。もとより、ソ連にとっても相互依存や国際協調などいわば国際体系の中の下位体系を非常に重視する傾向が出てきたことはきわめて注目すべきことであり、いずれにしてもそのようなグローバリズムがすすんでいくならば、そこから理論的にも出てくる問題としては、アフガン、インドシナ、ニカラグアなどに展開されている干渉主義を根本的に修正する可能性で

あろう。

この点でもソ連の世界戦略は、根本的に変わりつつあり、中ソ関係の改善を軸にして、より積極的な「平和外交」「軍縮外交」を展開することになるのではなからうか。

●社会主義の弱さゆえに

もとより、アメリカが多極志向にもかかわらず、例えばSDI問題に見られた、パックス・アメリカーナを思わせるようなアメリカの傲りを離れられないように、ソ連にとつても自らの基本的体質を脅かすような政策転換は、容易ではなからう。そして、ここでより重要な問題は、中ソ両大国が今後とも社会主義の根本的な内政上の弱さ、つまり社会主義国家としての正統性の危機に悩まざるを得ないことであり、このような内在的な弱点を考えると、逆に中ソ間は今後ますます相互補完的にならざるを得ないであろう。言ってみれば、中ソ対立などしている余裕がなくなりつつあるわけで、このようなソ連や中国の根本的な変化と中ソ関係の長期的安定化という方向性を、西側諸国が今後冷静に見てゆくことこそ必要であろう。

（なかじま・みねお）

東京外国語大学教授

世界週報

平成元年3月25日発行 第70巻第13号 通巻3403号
大正9年10月9日第3種郵便物認可

1989/3/25
臨時増刊号

90年代 世界はどう動く

21世紀を生きる国際ビジネスのために

90年代はどんな時代か

●インタビュー
神谷不二／加藤寛／長谷川慶太郎／水谷研治

関本忠弘・中内功・牧野昇

時代を読むキーポイント

日本の企業進出と外国からの挑戦

